

自然に對する態度

黒田清輝

繪畫と云ふものと、自然と云ふものは、元から離る可からざる性質のものである、其の故如何と云ふに、繪畫は所詮自然を土臺にするが當然だからである。然るに此の自然は自然でも、姿の同じで無い自然が多い、此の違つた自然を土臺にして書くとすれば、必ず夫や々々違つた繪畫の出来るは當然の事實である。次に同じ自然を觀ても、夫れから出た繪畫の相違ふのは、他に一つ思想と云ふものがあるのから起る、色々な思想の眼鏡を通して自然を觀る事になると、其處に又た非常な相違が出て来る。思想は國に依つて違ひ、時代に依つて違ひ、人に依つても違ふ、此等の種々に異つた、思想を通して自然を觀るから、勢い同じ自然を土臺にして出来上つた繪畫にも、色々な相違が出る譯である、併し之に就いて、一々其の好し惡しを云ふべき者では無いので、此の變化のしやうの様々な處が却つて面白いのである。若し藝術から此の變化を取り除けたならば、結局は何の趣味も無い事になるであらう。

餘り古い時代に及ばずとも、佛蘭西の百年以前に溯つて、此の變化を調べて見れば、自然に依つて生じた變化、又た思想を土臺にして生じた變化は、其間に澤山ある。此の變遷は、蛇か皮マムシを脱ぎ變へて行くとは違ひ、古いもの必らずしも其の儘變つては行かぬ。古いものから新しい子が生れ、夫れから又た次の子が生れるが、一方に古いものは古い儘で、多少の變化は其の間にあつても、其の姿は略ぼ存在して或る時代の間は残つて居る。此の百年

前の事を云へば、拿破崙一世の全盛時代前後には、非常な思想の變化があつたが、夫れを概括して云へば、希臘の美術が復活した、つまり古代熱が盛んになつた、假令ば日本で明治時代になつて、俄かに天平頃を回顧し、其の美術を慕ひ憧れたやうなものである。此の思想の眼鏡を通して觀察すれば、自然は大分古めかしいものである。夫れから又た佛蘭西では、古い時代を慕ふ思想が少し變つて、當時のもの、即ち其の時代に感動を起させるものを主眼として書くのと、中世紀あたりの文學を土臺にして、其の感想の、或る點を描がき顯はす事も起つて來た、併し是も勿論自然を離れはせぬが、今度は古希臘羅馬の風俗をやめて、中世紀或は當時の姿になつたと云ふだけで、唯だ自然の解釋が違つたのみである。然るに又た其の一方には、思想と云ふものよりも、全く自然を相手にして、自然から得られる感じを寫すと云ふ信念を以て研究した連中も澤山出來た、夫れが又た子を生んで、たとへば其等と同じ信念から出立しても、材料の點、解釋の方法に就いて、新しい方面を開拓するものか生れて來た、斯んな工合で、遂に今日に至つたのである。是れから如何なるものか生れて來るか、豫め知り得られぬが、兎に角今日の處では、自然の面白い部分を書き顯はす、即ち自然に對して得たる、或る感情を寫し出すを勉めて居るのが多い。然りとて前の百年前、又は其の以前の系統に係る畫家も無論あるが、新舊の二つのものには、根本に分れる二つの道がある。

夫れは前にも云つた思想を土臺にするものと、自然を土臺にするものとである。繪畫は元來自然から出るものであるけれど、繪畫を製作するに就ては、考へを主として、自然を借りて來るものと、自然の中の或るものを書くのとは、大變な差違がある。今日で多くの人の採る方針は、即ち後の方のものが勝つて居るやうである。たとへ

ば、茲に赤い海を書く人と、青い海を書く人と二つあるとする。青い海と云ふは、即ち海と云ふものを顯はすを主として、青い海を借りて其考へを示す、即ち海は青いものと云ふ、先天的の迷信の如きものがある、即ち此の迷信を書き顯はすので、頭腦を土臺としたものである。然らば赤い海とは何かと云ふに、此は前者の反對で、海の赤くなつた場合を描く、固より青い海が赤くなる場合も慥に在る、其の場合に重きを置き、一種の感情を動かされて、之を描くので、自分の意匠からでは無く、自然から受けた印象を書いたものである。夫れで時代思潮から云へば、即ち海の青いのは前の時代で、赤い海が今日の時代と思はれる。

夫れで仔細に觀察すれば、繪畫は自然を元として顯はすものであるから、自然に近い繪を書くのが、畫工の探る可き道であらう。夫れを兎角自然を學んでも、自然を觀察する事が充分で無い事が多い、之れが充分であるか否かに依つて、繪畫の發達の度合が違ふのである。此の寸法で昔からの繪畫を覽ると、時代を溯れば溯るほど不自然のものが多く、後世になつて益々自然に接近して來る、之は自然の順序である。

其處で歐羅巴の自然は、油畫に好く出て居るが、日本の自然は、油畫に顯はれぬと云ふ人が多いやうである、之には誤まる點が二つある。其の一つは日本の自然が、油畫に適せぬのでは無い、油繪の技術が、未だ充分に吾々の手に入らないと云ふのである。又た一つは、日本の油畫と云ふものは、極めて近い十數年間の發達に過ぎぬ、歐羅巴^{ミナ}已の云はゞ新しい觀察方法を、直ちに日本の自然に向つて應用したものだから、之を見る人が歐羅巴の時代思想に熟して居らぬ爲め、其の顯はした自然を不自然かのやうに思ひ、繪畫に就いて、充分な觀察を施す事が出來ぬのである。前述の如く、日本の今日の大部分の人は、迷信家で海は青いものと思つて居る、此の時代に赤い海や

黄色な海を書いたならば、世間は解する事が出来ぬ。夫れを描いて「海」と云ふ畫題の下に示したとすれば、此の畫工は如何なる批評を受けるか、忽ち罵言の下に葬られるは明らかな事實である。之を何故と云ふに、海は青いものである、然るに何程西洋の油畫だとして、青い海を赤く描く法は無い、とこう云つた思想の行き違ひから、一方では日本の自然なるものが油畫に適するや否や、又た日本の自然ばかりで無い、日本人が油畫を描く事が何かと云ふ疑問までも起る。夫れで此の油畫、或は水彩畫、或は毛筆畫なるものは、方法形式の別で、云はゞ流派の如きものである、如何なる自然には、如何なる流派が適當と定まつた事はあるまい、油畫で日本の自然を寫すことが出来ると同時に、毛筆畫で歐洲の自然を描き現す事も出来ると思ふ、併し迷信的頭腦の人に見せる爲であると當が外れる。

自然は國によつて無論異なる、其の異なる中に繪くべきものが幾くも存する。夫れを畫家は、特殊の着眼點によつて書き顯はすものであるから、自然其のものには罪が無い。日本の自然でも、油畫にして、西洋より面白い部分があるかも知れぬし、又た西洋で無ければ、面白味の無い自然も素よりあらう、日本人が油畫を描くに適當して居るか否かは、違つた問題である。日本人の頭腦が、全く迷信的で、以前に定^{きめ}られた以外、決して頭腦に入らぬものならば、日本での繪畫の進歩は望めない、又裝飾的方面から云つても、油畫のやうな使い難い材料を使ふ必要は無い、云はゞ大厦高樓の裝飾に適當した油畫の畫料が日本にあつても、日本人の要求として、大建築をする氣遣ひも無く、又た大建築があつても、其れを裝飾する必要がなければ、油繪は無用なものである、其の無用なものを以て世に立たらうとする油繪畫工は、無用の人間である。若しさうとせば、日本の油繪畫工は、之を以て道樂の材

料とでもするのでなければ、到底生きて居れぬ、従つて其道に入つたものは、自分獨りの樂みと云ふ事を精々の慰みとして世を送る覺悟がなければならぬ。併し之は極端な事で現在の日本の進歩と、次第に世界的になり行く實際の情態とを見れば、油畫は前述のやうな狭い情無い境遇のものでは無く、寧ろ充分發達の餘地があると思ふ。

此の思想を土臺にし、自然を借りて來て繪にすると云ふ事は、今日から見れば過去の事になつて居るが、夫れでも矢張り其舊式を固守して居る人もある。併し自然はそつちのけにして、畫室内で畫を作るといふやうな形式的のものを、其の儘遣ると云ふのでは、全く時代後れであると思ふ。どうしても型にならぬやうに、自分の觀察で矢張り自然中の或る妙味と思ふ處を現さねばならぬ、妙味の存する所を、自分の思想の代表者とするのが今日の理想である。夫で前にも云つた、□は海は青いで足りたが、今日は夫れでは面白くない、今日の人は海の青いのも知つて居るが、又た赤いのも、黄色なものも知つて居る、其の場合に適應して之を使用せねばならぬ。思想を土臺にして描く繪は、比類もなく高尚なものもあらうけれど、兎角自然の觀察を忘れるので幼稚になり、淺薄になる。今日の人は、もう迷信的の、字のやうな繪畫を見て満足するやうな幼稚な頭腦は持たぬ。今日では自然の變化を能く觀察するが必要なので、假へば人の體にしても、顔にしても、之れが赤いとも、白いとも定つたものではない、其の周圍のもの、又は天候の模様、其他色々なものがあつて、人間の色と云ふものには定りが付かぬ、其の中の或る物に畫工^マが動かされて、夫れを描き顯^マはした結果は、極めて不思議^マなものが出来るかも知らぬ、併し夫れが畫工に取つて最も興味のある處なのである。

例を私に探ると、自分は至つて思想の乏しいものであるから、大抵の場合に思想を元として畫を作ることにはな

い、多くは自然に依つて描くのであるが、他人の作によつて自然を見る事はせぬ、矢張前に云た通り自然の中の或る趣味を描き顯はす事に力めて居る。同じ山水に對しても、如何なる有名な場所でも、一向に感じのうつらぬ事がある。之は描かぬ。日の出、日没、日中、或は雨景、雪景、何れにしても、評判の好い景色だからとて書く氣はせぬ。自分の書かうと思ふ念の起るは、そんな評判の好い場所ではない。唯だ或る日向の藁小づみの處に、水車の影があつて、其原を將に没せんとする夕陽がかすれて居る。其の時の金粉でもなすつたやうな色合が草むらの一部分にでも映つて之が薄紫のやうに變じて行くかと思ふと間もなく又た水色に變る。何れの處にしても一刹那の面白味に何とも云へぬ愉快な感じを起す、斯る場合を多く畫にする。之れは豫め頭腦に鍊つた繪畫ではなく、其の時其の時に依つて動かされた感じである。之を多く繪畫にする。

處が斯う云ふ畫に對して、觀る人が幸ひに同感を起すものならば、或は人は褒めるかも知れぬ。併し若しさうではない、畫工獨りで認めた現象ならば、觀た人は何だらうと云ふに定つて居る。繪畫などは、人の彼是れ云ふのを心配しては、やれるものではないが、歐羅巴では、已に斯うした意義が立派に認られて居るに拘らず、日本だけは其邊に於て、未だ迷信的の事が勝つて居るので、一方に好いと云はれた事も、他方では、惡いときさされる事もある。こんな處から、智識ある日本人の中にさへも、油繪が日本に適するか否かの問題などが出るのであらう。苟も畫を見る人達には、兼てもう少し自然に向つて、細かい觀察を與へて貰ひたいものである。

も一つ自分が畫を拵へるに付いて云はゞ、其動機の如きものを概括すれば、前述の即座に得たる感じを、即座に寫す外に、も一つある。之は自然に向つて、其の自然の變化を能く見て居り、其の變化中で、自分の意に適した處

を、捉まへやうとして居る。此の時に知らず識らずの間に、自然の中に又た或る活動した自然を見出す、之は外でもない、たとへば草□に露の玉が轉マワかつて居る、そしていくらかの濕氣を含んだ空氣マヅが、其の邊りを包んで居る、之は夏の早朝に多く見る現象で、之れ丈は誰も見て誰も知つて居るが、サテ夫れに就いて、人は只涼しいとか冷たいとか云ふ肉體の感じ以外、何等の感じをも起さぬ事もあるだらう、が、自分は其の場合、殊に其の露、或は露と人間を連想して、其の中に多少の人が或は露或は霧を代表して活動して居るやうな、迷想のやうなものを惹き起す。此の自然より得たる迷想を形に顯はして書かうと試みる事が稀にある。こう云ふ畫を作る時には、無論徒らに人體を畫室で寫生して、其の中に箴め込む事は興味の無い事である。夫れには人も草も同じやうに思へる、或る場合に適當した姿、色、即ち草や木の、天候や、時象の爲に變化する、或る時を捉へると同じく、人を描くにも左様云ふ變化のする場合を捉まへて、其れに適當した場所に箴めるやうにして居る。

夫れで畫を作る事に就いて大に注意せねばならぬのは、成るべく型に據らずに、自然の中の變化ある狀態を能く觀察して、其の中から、個人性のものを描くやうに爲たい、と云ふ事である。即ち海を青いとも見ず、又た草も必ずしも緑でない、雪も常に白くないと云ふ事に注意して行つたならば、日本の自然は、日本獨特の色彩と形狀とを發揮し來るであらう。日本歐洲の自然だからと云つて、何も甚しい優劣はない、唯だ今日の有業で優劣のある所は、畫工の伎倆ばかりである。

實際形式の上から見れば、流派は土地によつて適不適がある様にも見えるが、自然を相手とする處に、決して適不適のあるものでない。たとへば裸體を描くにしても、希臘を土臺にした、一つの形式以外には、人體の美はな

いものとすれば、希臘人の外は裸體畫は描けぬ道理になる、然し希臘の美は希臘の美で至上の美ではあるが、偕て佛蘭西の美術となれば如何。たとへ佛蘭西は希臘式の美なものには及ばずとも、其型を脱して自國の自然を土臺にして製作したものは、希臘式以外に妙味がある、之を日本と歐洲と對照しても其の通りで、歐洲通りの油畫は、素より日本では出来ぬ。然し歐洲の材料を以てしても、日本で別に一種の妙味を描出するとすれば、歐洲人でも及ばぬ點が屹度出来る、之で見ても材料論の取るに足らん事は解る。自然に向つて研究の方針が何より肝要なのである。歐羅巴でも、希臘型以外に出られぬと云ふは、頗る愚な話であると云ふ事は、云はずと知れた事である。日本でも其内には必ず獨特の妙味を見るに至るであらう。

現今日本では全く研究時代に屬して居るから、兎角日本の自然を次にして、西洋畫らしいものを作りたがる傾きが其の結果個人性のものを見る事が六づかしくなる、出来るならば、個人性の物を見出したい。畫工として一番の肝要は、此の個人性の發揮にある。兎角繪畫でも何でも、知らんとする者は先づ學ばねばならぬ、學べば學んだものに累れて、容易に個人性を發揮し難い。自分は出来るならば、此の學ばざる繪畫を描くやうになりたいたいものと思つて居る。

昨年の文部省の展覽會の出品に就て、自分が或る人の質問に答へて、二様の見方が必要であると云ふたが、其二様とは如何なる事かと云へば、一には學び得たる繪、二つには學ばざる繪と是れである。前者は箇人性が少なく、趣味に缺けて居る、併し筆は巧みで、法は備つて居る。後者は、形式に缺けて技術には備はらぬ處が多いが、箇人性が顯はれて居る、是は畫としては非常に貴むべきものである。夫れで若し個人性を無視すれば、第二は見るに

足らぬもの許りとなる。然し此種の繪畫は技術かまづくとも、趣味があるといふ點から立派なものである。

元來此の趣味や、箇人性と云ふやうな事は、多く天賦に屬するので、學んだ處が駄目である。然し乍ら眞の美術としては、どうしても一の要素で、決して缺く可らざるものであるから、技術の如何では捨てられぬ。其れから學んだ方は、相當の修養の順序を経て、一通りの技術の出來たものだから、天然の趣味が無いからとて、これも捨てられはせぬ、此等の繪畫は、たとへ趣味が缺けて居ても、今の處では獎勵の爲に出して置くべき性質のものであらう、二つの見解とは先づこんな事である。自分は今日まで、矢張り學んで來たもので、いくら學び方が少く、又た完全でなかつたにしても、矢張り之が苦になり、自然の感想のみを書き現はす事に力め、又た自然の中に或る連鎖を求めて、其を形に現はすなどの試験を力めて居るが、始終學んだ事がいくらか邪魔をして、個人性だけを餘す事は餘程困難である。繪畫の上に、學んだ跡が顯はれては、如何にも面白味を缺く。其れを脱れようと今日は其の苦闘中である、到底出來ぬかも知れぬが、兎に角、思想を土臺とせず、自然を土臺とすべき事、學んだ繪畫を捨て、學ばざる繪畫、即ち個人性の發揮に力むべきは、今後の畫工たるものの守るべき二大要項であると思ふ。少くも自分だけは其の考へを以て、繪畫に對して居る。

『日本及日本人』五〇七 明治四二年四月